熟女に優しい管理人

　いきなり玄関に入ってきた見慣れた顔に、主婦の美貴子は驚いた。美貴子は三十歳の福岡市の分譲マンションに住む、美人妻だ。口を尖らせると、

「チャイムくらい押してもらえませんか。」

と抗議すると、

「うっかりしてすみません。だけど防犯上、玄関に鍵を掛けておくのは当たり前ですよ。マンションの玄関はオートロックですけどね。それを確認する意味でも突然ですが、開けさせてもらいました。」

とその四十代のだらしなさそうな男は発言した。美貴子は納得して、

「そうでしたね。わたしが不用心でしたわ。でも、お向か

いの北山さんも玄関に鍵をかけないとか言ってましたけど。」

フンフンと鼻を鳴らしながらその男は聞いていたが、背が高く肥満体の中年男性だ。

「北山さんにも注意しておきましょう。ただ、北山さんにではなく藤村さんに言わなければならないことがあります。おわかりでしょう。」

藤村美貴子は、そしらぬ顔をすると、

「なんですか。わたしには何の事か・・・。」

「ふん、わかっているくせに。先月の管理費を振り込んで欲しいんですがね。」

美貴子はあわてて、

「あと十日、待ってください。必ず振り込みます。」

そう言い訳をしながら、藤村美貴子は腰を動かした。主婦

にしては短いスカートが揺れた。足を開いて立っているのでパンティの下のほうが中年男の眼に入った。男はごくりと生唾を飲み込むと、

「十日もすれば来月の分を振り込む日になります。オーナーの方から今日取り立てるように言われましてね。」

パンティの色は黄色だった、と男は思い返していた。美貴子は愛想笑いを浮かべると、

「まあ、上がってお茶でも飲んでいってくださいな。コーヒーを出しますから。」

「あまり時間はありません。この後、巡回にも回りますからね。」

「お手間は取らせません。お上がりください。」

美貴子は後ろをその男に見せると、屈んで豊かな尻を突き出すと台所に入ったようだ。男は、しぶしぶと玄関を上が

った。台所からトレイにのせてコーヒーカップを運んできた美貴子はカーデガンを脱いで白の上着になっていた。メロンが二つ付いている様に胸は大きく膨らんで、ゆさゆさと揺れていた。豪華な応接セットのガラスのテーブルに美貴子はマイセンのコーヒーカップを置いた。立っている男に、

「どうぞ、お座りください。お粗末なソファですけど。」

男はそれに腰掛けた。すわり心地はとてもいい。マイセンはドイツの陶器で古い歴史を持ち、コーヒーカップには剣のマークがついている。二本の剣を交えた形が青色で描かれている。高価な代物で、ドイツのものは大抵なんでも高い。ベンツにしてもそうだ。カップ一個なら一万円と消費税といったところだ。これは 2013 年一月現在の値段で、アベノミクスという政策では値上がりするのかどうかは誰

も何ともいえない。男はマイセンのカップを手に取ると、

ぐいとコーヒーを飲んだ。カチャ、とカップを置いて、

「コーヒーぐらいでは待って一日ですね。奥さんが外出して、いなかった事にしておきましょうか。」

美貴子は喜びで眼を輝かせると、

「明日までには何とかします。」

男はマイセンのコーヒーカップの受け皿にも剣のマークが付いているのを見て、

「なんか高級そうなカップですね。管理費なんて一万千円ですよ。こんなものを買えるのだったら・・・。」

「いえ、これは結婚した時に友人に貰ったものなんです。」

そう言いながら美貴子は男に見えるように両脚を大きく開いた。世界最大の下着のメーカー、トリンプのパンティが

大きく現われた。トリンプも又、ドイツの会社だ。美貴子はパンティを上に引き上げているのか、割れ目がくっきりと写っている。美貴子が素早く足を広げたので男は釣られてその部分を見てしまった。美貴子は足を広げたままである。そこから眼を外すと男は、

「そういえば奥さん。奥さんを前にぼく、昔だけどテレビで見た事ありますよ。アイドルグループだったかなー、たしかアフタヌーン少女とかいうグループ名だと思いますけど・・・。」

藤村美貴子は照れたように微笑むと、両脚を心持ち少し更に広げた。割れ目の形も左右に広がる。

「そう、でしたけど。結婚して夫の転勤で福岡市に来たんです。もう５年も前になるかしら。今では福岡市の街を歩いても誰もわたしに気づかないんですよ。」

男はニヤリとして、

「それなら貯金もたくさんあるんじゃありませんか。管理費くらいまとめて払ってもいいと思うけどな。ぼく、アフタヌーン少女のＣＤは結構、買ったんだけどね。」

「それは、ありがとうございます。でも、わたしの貯金も主人と一つにしてまして、主人が管理してますから。」

そう言いながら美貴子は両脚を開いて元に戻す動作を数回した。その度に割れ目のあたりがピクンピクンと動く。中年男はそこを見ると眼をそらせた。思わず見てしまったのだ、元アイドル歌手の股の付け根を。その価値は一万千円なのか、と男は考えたが、

「それでは、ご主人に連絡させていただきます。私の勤務時間は五時半までなので、ご主人の会社の方に電話しますが・・・。」

美貴子は狼狽すると、

「それは困りますわ。このマンションの管理費はわたしが毎月振り込んでいますから。修繕積立金もですけど。」

「修繕積立金は問題なく振り込まれています。実際の問題として、わたしの給料は修繕積立金からは出ないのですけどね。会社の方からは今月の私の給料から減額するつもりらしいですが、奥さんのとこだけなんですよ。」

男の顔は真剣味を帯びた。美貴子は関心なさそうに、

「それなら少し遅れても会社の方はいいという事なのですね。」

「そうではないと思いますけど。私としても安い給料の少しでも減ると大変なんですよ。」

美貴子は頭を深く下げて、

「すみません。明日までになんとかしますから。」

と言い訳した時に上着の上から胸の谷間が見えた。ブラジャーはしている。意識的に見せてくれたようにも見えた。

男は立ち上がると、

「それでは明日、又来ますよ。」

と苦々しく吐き捨てると長身の肥満体を玄関まで移動させた。

男の名前は三船敏行という。福岡市の県立高校を卒業後、上京して不動産会社に就職した。バブルの時は羽振りがよかったが、バブルが弾けてその会社は倒産。別の不動産会社も採用してくれなかった。アルバイトから派遣に登録して働いたが政権交代で派遣の禁止により、仕事を失う。都営住宅も五十歳以上でなければ入居できず、都の住宅補助金を受けようかとも考えたが仕事に目途がつかないので故

郷に帰ったのだ。そんな故郷でなんとか分譲マンションの管理人の仕事にありついた。福岡市の中央区大名に本社を構える繁売住宅という会社は主に分譲マンションの販売管理を行う大きな会社だ。元は早良区（さわらく）で賃貸住宅の仲介をしていたが、小さな分譲マンションから始めて成功すると、福岡市のあちこちにお城のような巨大な分譲マンションを建設していった。福岡市はかなり前から一戸建て住宅を建てる土地は中心に近い場所はなくなっていた。近郊の筑紫野市などが建売住宅が販売されてはいるものの、通勤には時間がかかるため、市内の中心になるべく近いところに住みたい人が多いために分譲マンションがすぐに完売する現況で、繁売住宅も大いに儲かっている。他には東京からの分譲マンション会社のものも少なくはない。ライオンズマンションやダイアパレス、東急、三井パークホー

ムなどが眼につく分譲マンションだ。

三船敏行も四十歳になる。管理人になるには早い年齢だが、他に仕事は見つからなかった。彼の担当している博多区の博多駅から南の巨大な分譲マンションは建築されて新しい。とはいえ分譲マンションなので主婦の年齢は三十代後半が主で、藤村美貴子は若い方だ。三船は美貴子の部屋を出てからも彼女の黄色いパンティが目の前にチラつくのを意志の力で振り切りつつ、管理人室に戻った。

　藤村美貴子はエリート会社員の男性と結婚して芸能界をやめた。結婚生活は五年になるが子供はまだいない。そのせいもあってか、貯蓄するより浪費する事がなかなかやめられないでいた。歌手だった頃より少し太ったので、博多駅近くのエステサロンに行ったりアマゾンでダイエットサプリメントを購入したりしていた。その購入も一時にかな

りのものを買ってしまう。芸能人の多い無料ブログでブログも作ってみたが、文章を書くのが面倒になって閉鎖した。ひとつはアクセス数が少なかったのも原因で、今は彼女が属していたグループより別の四十人以上いるグループに注目がいっているためのようだ。ステルスマーケティングを頼まれる事もなかったので幸いだとは言えるのだが。

　夫の拓郎は深夜に帰宅する。エリートな彼には仕事が山ほど押し付けられる。

「ただいまあー。」

疲れきった夫の声を玄関で聞いた美貴子は、

「お帰りなさい。今日も晩御飯は外でだったのね。」

「ああ、取引先との接待でご馳走を食べたよ。」

「そーお。なら、ベッドの中でのご馳走はまだ食べれるわよね？」

美貴子は豊乳を拓郎の背中に擦り付ける。

「今日はいいよ。土曜の夜ならできるかもな。」

美貴子は失望をあらわにすると、

「はやく食べないと腐っちゃうわよー。」

と投げかける。ハンサムな拓郎はにこりともせずに、

「風呂に入ってくるよ。」

と言うなり美貴子から遠ざかった。先にベッドで寝ていた美貴子の隣に拓郎がパジャマ姿で入ってくると、

「おやすみ。」

と言うが早いか眠ってしまった。美貴子は夫のモノにパジャマの上から触ってみたが、そちらもすぐに眠ってしまったらしい。

安い家賃の木造アパートに帰った三船敏行は万年雪のよう

な布団に入ると眠ろうとしたが、昼間見た藤村美貴子の黄色いパンティを思い出すと股間に血液が集まってくるのを感じた。少しの時間で、敏行のモノはカチンカチンになった。

（今頃、藤村のやつ、旦那とセックスに励んでるんだろうな。あの時見えた割れ目に突っ込んでなー。）美貴子の上で腰を激しく振っている男の姿を敏行はボンヤリと想像してみた。

次の日、三船は藤村の部屋へ朝から集金に行った。ドアノブを回したが、鍵が掛かっていた。チャイムを鳴らすと、

「はーい。」

「管理人です、おはようございます。藤村さん。」

「今あけますね。ちょっと待ってください。」

昨日より若やいだ声がした。ガチャと音がしてドアが開く。

取っ手を握って中に入った三船は、下着姿の美貴子を見てしまった。思わず股間にエネルギーが集まりかけるのを制して、

「奥さん。着替えの最中なら開けなくてもいいですよ。待ちますから。」

扉の外に出かかる三船に美貴子は近づくと、管理人の制服に右手をかけた。

「ドアを閉めてくださいな。通りかかった人に見られますから。」

三船は慌ててドアを閉めた。美貴子は三船の肩を引くと、

「あがってください。」

と言いながら左手で軽く三船の股間に触れた。美貴子は嬉しそうに、

「元気がいいですね。朝から。」

三船は答えようがなかった。美貴子の甘い匂いが鼻にかかってきた。ボンヤリする頭を左右に軽く振ると、

「すみません。あの管理料をお願いします。」

美貴子は今度は右手でぐうっと三船の股間を握ると、それはますます膨らんだ。

「奥さん、やめてください。これ以上、触られたらぼくは、もう・・・。」

「うふふ。主人はとっくに出勤しているわ。わたしたち最近、セックスレスなの。だから、管理人さんにストレスを解消してほしいのよ。」

美貴子は三船の腰に左手を回す。右手は三船のモノを握ったまま、

「靴を脱いであがってよ。管理人さん。」

三船はそのままの姿勢で靴を脱ぐと、部屋に上がった。美貴子の右手にペニスを握られたまま三船は歩かされた。美貴子は止まると、左手でドアを開けた。そこは夫婦の寝室だった。甘酸っぱい香水の匂いが三船の鼻の穴から入ってくる。三船の股間は管理人の制服のズボンを破りそうだった。美貴子は、

「ズボンを脱がせてあげる。」

両手でベルトを掴むと外して、フックも外し、チャックを下げた。三船の黒いパンツが出てきた。小さなバナナが中に入っているようだ。美貴子はそのパンツも降ろすと、ついに管理人の天空に向かった肉根を眺める。

「まあ、主人のより大きいわ。食べたくなっちゃった。」

彼女は三船のフランクフルトソーセージに、しゃぶりついたのだ。管理人は、

「あっ、だめです。奥さん、イキそうです。」

と声を出すと、腰を震わせた。美貴子の甘い舌を自分のモノに感じて三船は、

（これが藤村美貴子の舌なのか。なんという滑らかな動きだろう。ああっ、おれはこんな事をしていいのだろうか。）窓の方を見るとカーテンが、かかったままだ。部屋には灯りがついている。あまりに明るいため、朝の太陽光と思っていたのだ。美貴子は舌を這わせながら、三船のきんたまを右手で撫でた。その瞬間、三船は、

「あああっ、奥さん！藤村さん！」

と小さく叫ぶと、生ぬるい液体を勢いよく美貴子の口の中に発射していた。それは美貴子の口の中にビシャッとかかった。美貴子はだらんとした顔で、その液体を飲み干している。

「おいしいな。管理人さんも気持ちよかったでしょ。」

「はい。あ、あの藤村さんの舌って滑らかですね。」

「歌手だったからじゃないかな。ボイストレーニングの時、男の先生のペニスをよく口に含まされたわ。そのまま、メロディを口ずさんだ事もあるの。女性歌手って結構、そんな訓練してるみたいよ。アフタヌーン少女のメンバーもみんな作曲家の先生のちんこをしゃぶってるし。そうしないと曲を提供してやらないぞ、なんて言われたりしてね。わたしたちも若かったし、作曲家の先生のアソコにも興味があったから、進んでしゃぶってみたんだ。なかなかの味がしたわ。そうするうちに、アフタヌーンも売れ出したっていう事なのよ。」

美貴子はその頃を回想する。

初老のその作曲家は自宅のマンションの防音設備が整った部屋でピアノを弾きながら美貴子を指導していた。美貴子が誤った音を歌うと、

「だめだめ。そんなノドじゃ、素人だ。今から、プロの歌手としてデビューする。そのためにはな、特訓が必要だ。」

部屋の中には美貴子とその作曲家だけだ。白髪が少し混じったその男は、

「特訓についてくる勇気はあるか。」

と美貴子に聞いた。美貴子は有名な歌手になれるのなら、と思い、

「はい、がんばりますのでお願いしますっ。」

と元気よく答えた。男はうなずくと、ピアノの椅子に座ったまま美貴子に姿勢を向けると、右手でズボンのチャック

を引き下げ中からダラリとしたモノを出した。それはまだちいさなソーセージのようなものだった。美貴子はハッとしたが、平静を顔に装った。作曲家は美貴子の眼を見ると、

「どうしてるんだ。咥えなさい、私のちんこを。」

と促してくる。美貴子は、きゃっ、恥ずかしいなどという反応はせずに思い切りよくそのソーセージを跪いて口に入れた。アンモニアの匂いが少ししたが、ソレは少しずつ大きくなってくる。やがてそれは美貴子の口の中に広がった。男は満足そうに、

「君は舌の動かし方がうまいようだね。いい歌手になれるよ。そのまま続けていい。そうだな、今練習している曲をハミングしてみなさい。」

美貴子は新曲を作曲家のモノを咥えたまま、ハミングした。男は、

「よーし。なかなかいいよ。こういった訓練はいずれ役に立つ。テレビ局のプロデューサーやディレクター、それから業界の大物に求められた時もためらってはいかんよ。スターダムにのし上がるには、こういった接待が必要なのだからね。それを知らん若造はアイドルになればキャーキャーと騒いでくれるが、それが君たちのビジネスだ。うっ、おおー、もう久し振りだなー。出すよ、出る出る、打ち出の小槌。」

作曲家は身をのけ反らせると美貴子の口の中に緩やかに放出した。美貴子は吐き出すとまずいかな、と考えて全部それを飲み込んだ。それを見た作曲家は大満足のようだった。後年、その作曲家は美貴子のソロアルバムの曲を全部作ってくれた。

ハッと我に返った美貴子の前で、管理人がズボンのベルトを締めているのが見えた。三船は、

「藤村さん。今月の管理費はいいですよ。ぼくが出しておきますから。」

と提案すると、美貴子はしめしめという顔をして、

「そうしてもらえると助かります。これ位でいいのかしら。」

「もちろんですよ。デリヘルはもう少しするし、て、それと比較してはいけないと思います。ただ、風俗の女性は中洲でも三十歳未満が常識です。」

「あら、それならわたしは失格ね。もう三十だもの。」

「普通の三十歳とは違いますよ、藤村さんは。」

「嬉しいな。ああ、カーテン開けますね。どこからも見えないし。」

「失礼します。藤村さん。」

そそくさと、三船は玄関に移動した。その日は五時半にいつものように管理業務は終了したが、それから中央区大名にある繁売住宅の本社に藤村家の管理費を三船は届けに行った。というより、近くのゆうちょのＡＴＭで自分の口座から一万千円を卸して持っていったのだ。

本社一階の業務部で三船は、

「サンパール博多駅南の藤村さんの管理費ですが、奥さんに直接預かってきました。奥さんが忙しくて振り込めないとの事でしたので。」

業務部の若い女性が三船に近づいてくると、三船が差し出したお札を受け取り、

「社長が三船さんが来たら、社長室に来るようにとの事です。」

と事務的に話す。三船が戸惑うとその女性は続けて、

「社長室は最上階の十階です。エレベーターで行けます。」

三船は踵を返すと、エレベーターで社長室に駆けつけた。

社長室のドアの横にパナソニックのテレビドアフォンがあった。それを押すと、

「三船さんですね。お入りください。」

秘書らしい女性の声がする。